NPO法人加治川ネット21情報紙

水辺のひろば

No.15
2012年 4月 1日発行

「我が家の味噌が一番」と熱心に材料を仕込む参加者

スローフードを体験

安全な食材で手前味噌づくり

第8回手前味噌の会が3月24日、聖籠町二本松の公会堂を会場に開催されました。スローフードを体験してみようと、藤田味噌糀店の協力を得ながら始めたこの企画も、今年で8回目。今回は50人以上の参加となりました。

スローフードとは、マクドナルドに代表されるようなファストフードの対義語として捉えられていますが、その土地の風土にあった伝統食文化・農業を大切にするための運動をさします。私たちの地域で言えばスローフードの代表格は味噌ではないかと考えています。

味噌の材料は、遺伝子の組み替えを行っていない県内産大豆と、地元産の米で作った糀、そして、それぞれがこだわりを持った塩です。材料が同じでも、熟成する環境が違うと違った味に仕上がり、市販の味噌とは一味も二味も違ったおいしい味噌ができるため、リピーターの多い事業となっています。

この事業を通じて参加者が顔見知りになり、交流の輪が広がるとともに、スローフードの活動がもっと広がることを期待しています。

（報告／渡辺利道）

加治川ネット21

15周年を迎えて

加治川ネット21の設立は平成8年秋、そして、平成15年5月には法人格を取得し、より活動の幅を広げてきました。そんな当会も昨年秋、15周年を迎えました。ここでは、その活動の一端を紹介します。

環境保全活動

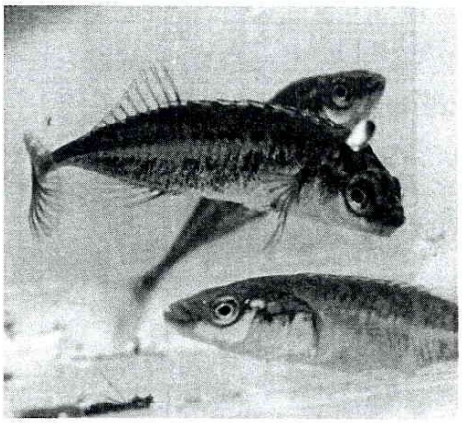
当会の活動内容は大きく分けて、環境の保全を図る活動、文化の振興を図る活動、まちづくりの推進を図る活動、社会教育の推進を図る活動の四つ。中でも近年力を入れているのが、絶滅危惧種イバラトミヨの保護活動です。

イバラトミヨの棲む豊かな環境

「新発田市にあった生息地は、U字溝に替わって消滅した」と「レッドデータブックにいがた」に記載された新発田市のイバラトミヨですが、2002年8月に新発田市六日町地区で生息が再確認されました。その後、隣接する久保地区、太斉地区でも生息が確認され、現在まで地域の方々や当会などにより調査・保護活動が行われています。

イバラトミヨは、かつて、県内の湧水の豊富な水田地帯に広く分布していましたが、生息環境の悪化や農薬等の影響で減少し、絶滅危惧I類(このままでは絶滅する可能性の大きい生物)に分類されました。名前の通り背中にトゲがある5㎝ほどのかわいらしい魚で、用水路の植物を利用して小鳥のような巣をつくり、雄が子育てをするユニークな習性があります。

同地区では田んぼの区画整理事業が行われており、イバラトミヨの生息が危ぶまれましたが、地域や行政などの関係者で話し合い、用水路とファームポンド(ため池)の一部を土底のまま残すことになりました。当会では、毎年、生息状況を追跡調査しています。その結果、用水路では、湧水が減少し続けており、生息は厳しい状況にありますが、ファームポンドでは、移行帯(エコトーン)を整備したことにより、イバラトミヨの繁殖が確認されています。



絶滅が心配されるイバラトミヨ

私たちは今後も地域の方々と協調しながら、用水路やファームポンドの変遷を観察し、イバラトミヨが生息できる豊かな農村環境を保全していく予定です。

(報告／藤田利昭)

文化推進活動

川は危険、でも楽しい場所でもあります。そんな体験を提供しているのが、毎年恒例となっている「水辺の大楽校・ぼくらは加治川探検隊」です。川に入って遊んだり、生物や植物の調査をしたり、親子で夏の一日を過ごします。市外からのリピータ参加家族もいて好評の事業です。

今年で10年 川で親しむ「加治川探検隊」

天然プールという公認の遊泳場のある加治川は、新発田が全国に誇れるものだと思います。地元の人はもちろん、市内、市外の人も、加治川で泳ぐ体験をした人は多いと思われます。

「加治川で魚捕りをさせたい。」「加治川で泳がせたい。できれば浮き輪か何かを着けて一緒に流れて遊びたい」、子どもの頃に行っていた加治川での楽しかった遊びを現在の子どもに体験させることが、加治川ネット設立時の大きな夢の一つでした。

2001年、いよいよその夢が叶う時がきました。第1回「ぼくらは加治川探検

こんな活動も…

文化の探究・歴史ウオーク

地域に残る文化の探究も大切な活動の一つ。まちの中に残る古い建物や裏道、歴史の残る石碑を調べたり、参勤交代で利用した昔の街道を実際に歩いたり。新発田市主催の歴史ウオークに会津街道の峠越えを提案し、スタッフとして参加者の皆さんと歩きました。

まちづくり活動支援事業

他団体と連携し、環境、文化、福祉などのさまざまな事業を主催・共催しています。新発田市の「まちづくり活動支援事業審査会」で

フィック新潟、大進電業㈱、㈲ひかり電工、㈱ミトモ電設、ベック㈲、北越緑化㈱、新発田ガス㈱、菊水酒造㈱、NPO法人 赤とんぼ、㈱馬場工務店、㈱小池組、イー㈱、㈱花安 新発田斎場、㈱新潟グリーンテック、高橋基礎屋㈲、昭栄印刷㈱、若月建設㈱、川東土地改良区、豊浦郷土地改良区、大豊電気㈱

隊」の開催です。会場はもちろん岡田の「天然プール」でした。川遊びの楽しさを知った子どもたちの歓声が響きました。この歓声がこの事業を継続させる力になっています。

遊びだけでなく、生き物調査もしています。魚類はヤマメやアユなど9種類、昆虫類ではカワムシやヤゴが8種類。これらの生物は基本的に昔とほとんど変わっていないようです。去年はカブトムシやクワガタも数多く捕まえることができました。変わらない加治川の姿に本当に感動しました。

そしてこの事業の一番の目玉が、ライフジャケットを着て加治川を流れる「カッパ体験」。最初は怖がっておそるおそる流れていく子どもも1時間もすれば喜んで流れていきます。

「川が楽しい場所だ」と思うからこそ、「川を大切にしよう」と思うはず。これからも継続していきたい事業です。

（報告／永野　修）

ライフジャケットを使った「川流れ」に人気集中

社会教育推進活動

環境学習を支援 成果発表会も開催

社会教育推進活動の代表は、地域や小学校などでの環境学習の支援。小学校へは多い年は年間に延10～15回の授業を受け持つこともあります。児童たちは、学習を通じ自分たちの住む地域に関心を持つようになり、環境に目を向け始めました。

そんな児童たちの気づきや学習成果を多くの方に知ってもらう機会を提供するため、平成19年からは、生涯学習センターを会場に、環境学習発表会やパネル展も実施しました。

環境学習発表会やパネル展は、新発田市内の小学校を対象に、当会の10周年記念事業として開催したものですが、もっと続けてほしいとの多くの声に後押しされ、2回目からは聖籠町の小学校も加わり、昨年秋、第5回を開催することができました。

地域の川の水質調査や生物調査、絶滅危惧種イバラトミヨとそれを取り巻く環境、川の上流と下流のつながり、食、ごみ、地域と協力した農業など、環境といっても、切り口はいろいろ。それぞれが学校や地域にあったテーマで取り組み、毎回、その観察力、発表力は多くの人を感動させています。また、ステージ発表に併わせ実施しているパネル展には、毎回20校以上が参加し、学習成果を発表しています。

小学校では総合学習の授業時間が減り、環境学習に取り組むことが難しい状況となっていますが、当会ではこれからも学習支援を続けていきます。

するどい発表力、観察力は大人も顔まけです

東日本大震災避難者支援事業

昨年の東日本大震災では、多くの人が新発田市に避難してきました。当会では避難者たちに楽しみながら参加してもらえるようにと、一緒に豚汁を作ったり、他団体にも呼び掛けて古着を集め、バーゲン感覚の無料古着市を開催したり、親子を加治川の遊びに招待したり、さまざまな事業を展開しています。

も、その活動がたびたび評価されました。

環境豆知識

スマート○○

最近、携帯電話のスマートフォンをはじめ「スマートグリッド」、「スマートメーター」というような「スマート○○」な言葉がよく登場します。スマートには「洗練された、利口」という意味があり、今は主に「電力」をIT技術を使って効率よく供給するという意味で使われています。

従来の発電に加えて、今後は、太陽光や風力発電など再生可能なエネルギーの普及で、今まで消費者側にいた家庭や企業からの電力供給が増え、電力の双方向化や分散の拡大が進むと予想されます。ただし、これらの自然エネルギーは常に安定的に供給出来るかが課題です。

そこで全体の電力需給をIT技術を使って詳細に把握し、電力網全体で平準化することで、既存電力と再生エネルギーをうまく供給しようというものです。

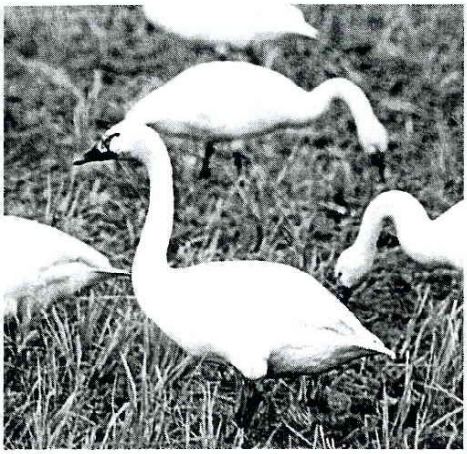
スマートグリッドは、電力を効率的に低コストで供給させる賢い電力網であり、個々の家庭には既存の電力計に替え、通信機能の付いたスマートメーターが省エネ機能を働かせて消費電力を賢く管理していきます。

参考出典「一般財団法人 環境情報センター」

NPO法人 加治川ネット21団体会員紹介（順不同）

㈱日園、曽根建㈱、㈲みずほ園芸、㈱アート
㈱静岡グリーンサービス、㈲聖光園、エヌシ

人と自然…
原発事故による境界域



福島原発事故により、放射線量の高い地区が警戒区域に指定されています。動物たちの生息する山も例外ではなく、警戒区域になれば、当然のことながら狩猟もできないため、一種の野生動物保護区となります。

野生動物には警戒区域のラインも、道路の検問もまったく意味がありません。山が放射能で汚染されているということは、動物たちの汚染にもつながります。

茨城県大子町では、イノシシ1頭を捕獲するごとに、助成金1万円を出す取り組みが始まっています。イノシシは食用の自粛が呼びかけられているので値がつかず、だれも猟に出なくなります。そうすると「狩猟圧」が弱まり、イノシシの個体数が増えて、農作物への被害が増加するという切実な問題につながるのです。

人間の生活エリアは、里山という緩衝地帯をもつことで、野生動物の空間がじかに侵食してくることを抑えてきました。しかし、原発事故では人と自然との境界は大きく揺らぎ、「野性動物保護区」がなんの準備も境界もなく、いきなり出現してしまったのです。捕獲しても処理することができず、狩猟そのものが困難です。そしてこの保護区は困ったことに、汚れた「野生の王国」です。

「ふくしま会議」に出席している東北学・民俗学者の赤坂憲雄さんは「もっと深刻な問題を引き起こすのは、野鳥や昆虫かもしれない。小さな生き物たちが汚染の拡大にどう影響するのか、食物連鎖の中で人間にいかなる影響がもたらされるのか。」と話します。

自然は、私たちの意志ではコントロールできません。そんな当然のことが、常に意識しないと忘れられてしまうのは残念なことです。

寄稿 殿様街道てくてく旅 ⑨

会津から白河へ

殿様気分で、参勤交代の道を新発田から江戸を目指し出発した殿様街道てくてく旅。実際には江戸まであとわずかの所まで到達しているが、レポートは紙面の都合でまだ福島県。今回は白河街道勢至堂峠の話から。

勢至堂峠の道はトンネルが開通し、あっという間に通過してしまうが、昔は会津藩と白川藩の藩境となっており、街道は馬車などが通れないように段違いに作られており、荷物をこの峠で積み替えていたとか。その名残が今でも残されている。勢至堂峠の入り口はトンネルの入り口右側から迂回して入るようになっているが、我々は地元の方の案内でトンネル左側の急な階段を上る。この道は史談会が年に一度草刈をしているとのこと。階段の入り口に太閤の道の標識があり分かりやすい。階段を上りきると本来の道に合流する。しばらく杉林の中を登るが、途中に「会津、新発田、村上藩主参勤交代の道」の木柱が杉の木に縛り付けてある。やがて、その道も獣道のようになり案内人がいないと迷いそうである。5分ほど上ると急に周りが広葉樹の林に変わり明るくなったと思うと峠に着く。

峠には「これより西会津領」と書かれた石碑が建っている。ここで小休止し、峠道を下る。下りの道は街道の名残が残っており、途中には石畳も確認できる。しばらく下ると、旧国道に出る。旧国道との合流部にはやはり太閤道の立派な標識がある。勢至堂峠の旧道は黒森峠と同じく九十九折の道路であるが、だいぶ前に廃道となったためか、落ち葉が積もっていて滑りそうで恐い。(T.W)

(次号へ続く)

《編集後記》

▼とりわけ長かった今年の冬もようやく終わり、春が来ました。四月後半には、加治川堤の桜も満開の花を咲かせるでしょう。加治川堤の桜は場所によって生育の大きさに差を持ちながらも、往時の姿に復元されつつあります。今年も多くのお花見客で賑わうことでしょう。

土手の上部は、両岸とも国道七号線の加治大橋から下流の紫雲寺橋までは舗装がされ、両岸一周すると12キロメートル余りのジョギングやサイクリング、ウォーキングにとても良いコースになっています。

満開の桜と青い空に、雪解けの二王子山を見ながら、走っても歩いてもとても気持ちのよいものです。

花見会場の一箇所で滞まっているのがなんともったいないことか。是非、一つ先の橋まで歩いてみてください。花と川と雪山の春の景色を見ながらのんびり歩けば、あなたのお気に入りのベストスポットが必ず見つかることでしょう。

NPO法人加治川ネット21の紹介

設　立	1996年11月。2003年5月法人化
活動目的	21世紀を生きる子どもたちによい環境(自然、伝統、文化)を残し、伝える。
主な活動	水と親しむ水辺の大楽校、生き物調査、小学校環境学習支援、川辺や町並み散策、手前みそ作り、シンポジウム開催
受賞歴	環境大臣表彰、新潟県環境賞、「日本の水をきれいにする会」会長表彰ほか
年会費	法人会員10,000円、個人会員2,000円

発行:NPO法人 加治川ネット21　事務局:新発田市諏訪町1-3-21 まちカフェ・りんく内　電話:090-8080-1349　メールアドレス:kjn21@ml.shibata.ne.jp